

## ゲンペイカズラの栽培に関する研究 3. 挿し木の時期とその部位

著者	福留 弘康
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	5
ページ	4-5
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/9873">http://hdl.handle.net/10232/9873</a>

# ゲンペイカズラの栽培に関する研究

## 3. 挿し木の時期とその部位

福 留 弘 康

### 緒 言

鉢物の需要が多様化しているが、消費者からは長期にわたり観賞可能な花木類の要求も多い。著者は花木類のゲンペイカズラ (*Clerodendrum thomsoniae* Balf.) の栽培に適した日照条件と用土について前報で報告した。この植物の繁殖は挿し木で行ってきたが、適切な挿し木の時期及び挿し穂の部位などについてはあまり明らかではなかった。

そこで本研究では、挿し穂の部位、挿し木用土及び時期などがゲンペイカズラ挿し穂の発根にどのような影響を及ぼすかを調査し、最適な挿し木条件を検討した。

### 材料と方法

挿し木は1994年12月9日(1回)、1995年2月14日(2回)、6月19日(3回)、8月1日(4回)の計4回行った。挿し穂は、鉢植えのゲンペイカズラの約30cm以上に伸びた蔓を3等分(先端から先端部:T、中間部:M、基部:B)し、それぞれの部位から1~2芽をつけた7cm~8cmを挿し穂として供した。挿し木時には、発根を促進するため切り口に生長調節剤のインドール酪酸0.4%液剤、1秒浸漬及びインドール酪酸0.5%粉剤の塗布処理を行い、無処理を対照とした。挿し木用土は鹿沼土(粒径3mm)、パーミキュライト、ココピートを用い、各用土を充填したセルポット(128穴)の1穴に1本挿し後、指宿植物試験場ミスト室内に置いた。処理本数は1区あたり8本とし、結果は8本の平均値で示した。

調査は根数、根乾物重、発根率について挿し木から30日~40日後に行った。根数は挿し穂から2mm以上伸長しているものを数え、根乾物重は80℃の乾熱器で48時間以上乾燥して測定した。

### 結果と考察

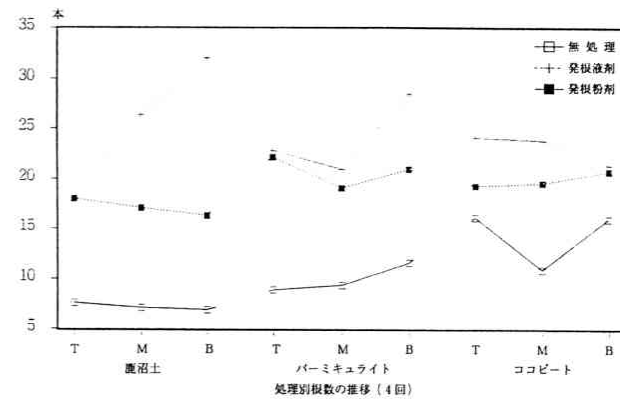
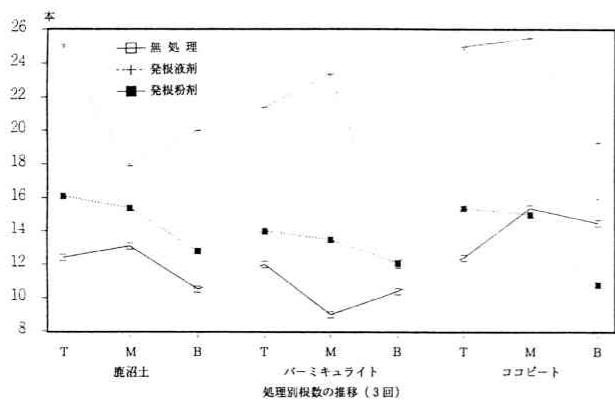
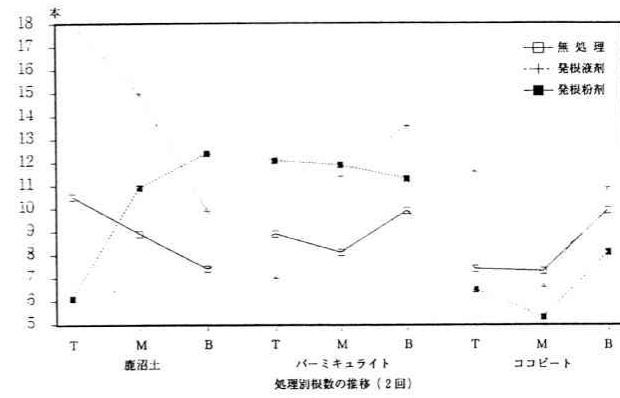
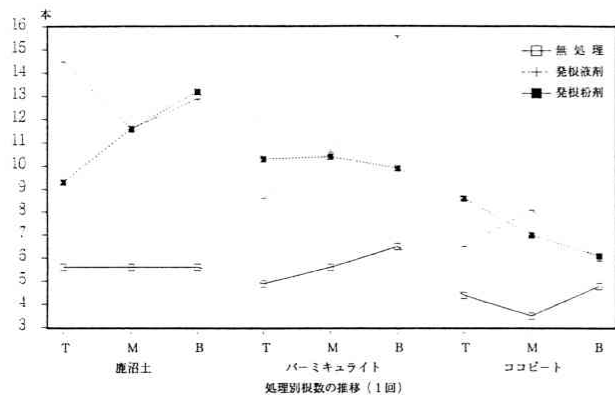
最多根数は1回目パーミキュライト-基部-液、2回目鹿沼-先端-液、3回目ココピート-中間-液、4回目鹿沼-基部-液であった。最小は1回目ココピート-中間-無、2回目ココピート-中間-粉、3回目パーミキュライト-中間-無、4回目鹿沼-基部-無であり、根数については挿し穂の部位、用土に関係なく4回とも液剤処理したものが最大を示した(第1図)。

根乾物重は、最大は1回目鹿沼-基部-粉、2回目ココピート-基部-粉、3回目ココピート-基部-無、4回目ココピート-基部-液で、基部挿しが4回とも大であった。最小は1回目鹿沼-中間-無、2回目鹿沼-基部-液、3回目鹿沼-先端-液、4回目パーミキュライト-中間-液、ココピート-中間-粉で液剤処理区に乾物重の減少が多く見られた(第2図)。これは、処理によって発根は促進されたものの、根の乾物量は必ずしも多くなっていないことを示していると思われる。発根率は2回目のパーミキュライト-先端-液、ココピート-先端-無、鹿沼-中間-液、パーミキュライト-中間-液及び無をのぞき100%であった。

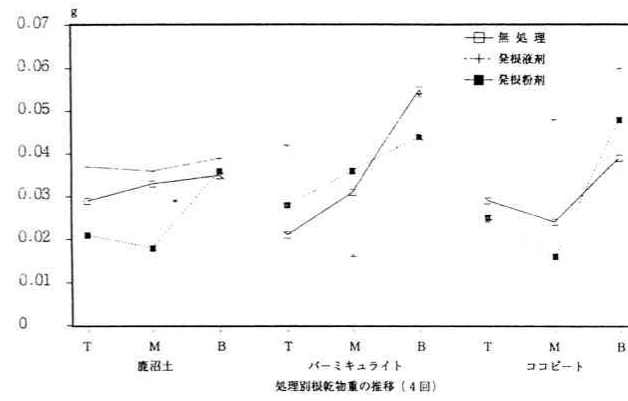
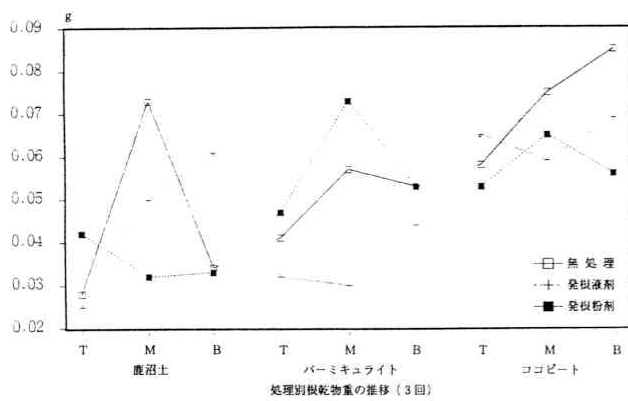
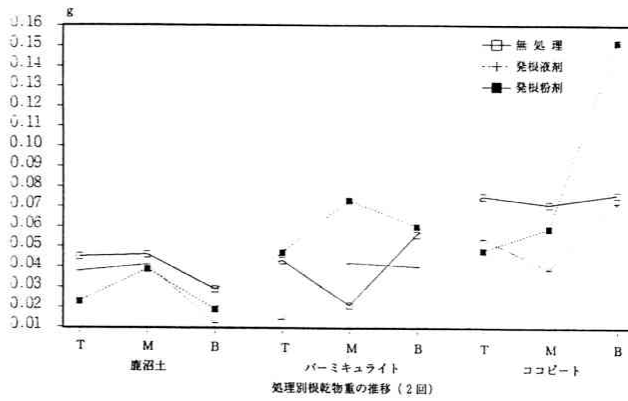
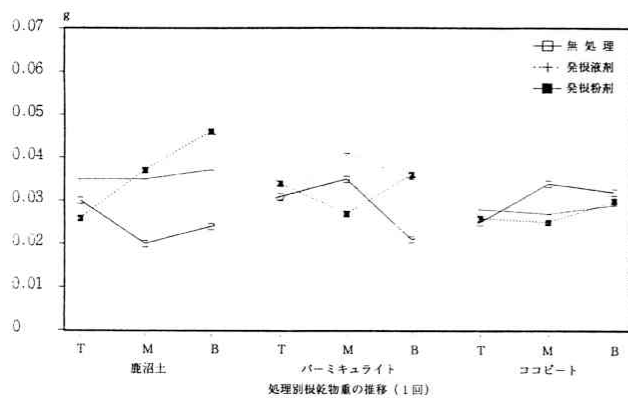
挿し木用土について生長調節剤処理区別の最大値を比較すると、最多根数は鹿沼土で他区に比べ最大値を示す処理区が多く、最大根乾物重ではココピートが同じく多くなった。部位別では、最多根数は先端部と基部が最も多く、根乾物重では基部が最大であった。今後は、花木鉢物として一番の問題点である着花数の促進と開花期間の延長のための栽培技術の確立を検討したい。

### 摘 要

指宿植物試験場におけるゲンペイカズラの挿し木の時期はほぼ年間を通して可能であると思われる。用土では鹿沼土の場合根数は最多であるが、根の充実の点からみるとココピートが適しているように思えた。挿し穂の部位については先端部および基部が良かった。今回の処理ではいずれも比較的良好に発根しており、ゲンペイカズラは挿し木繁殖がかなり容易な植物であることが判明した。



第1図 生長調節剤処理別発根数。



第2図 生長調節剤処理別根乾物重。